

楽しくブラオワリ 地図を片手に歩く名古屋今昔

大須散策

杉野 尚夫

明治24年地形図



コース概略

地下鉄上前津駅改札口→万松寺→本願寺名古屋別院→大須観音→富士浅間神社→清寿院柳下水→那古野山公園→北野天神社→日出神社→地下鉄大須観音駅(約4km、2時間)

1 大須から来た観音

大須観音のある場所の町名は長い間「門前町」だった。昭和44年の住居表示の際に門前町を含むかなり広い地域（東西は新堀川と堀川、南北は若宮大通と大須通に囲まれた区域）に「大須一丁目～四丁目」の新町名がつけられた。大須観音は大須二丁目にある。

しかし、正式に大須という町名がつけられる以前も、おそらく明治の初め頃から、人々は大須といえばあのあたりという共通認識を持った地域だったようだ。つまり、大須というのは「大須観音」を指すというより大須観音を含むかなり広域の盛り場の通称であったわけだ。

大須観音の正式名称は、北野山真福寺宝生院といい、真言宗智山派に属し、京都の智積院の末寺。別格本山。大須観音は、現在地へ移転する前に「大須」というところにあつたので、「大須から来た観音」が「大須観音」になった。元弘3年（1333）後醍醐天皇の勅願により尾張国中島郡長岡庄大須に北野天満宮社が勧請された。北野社の別当寺（神宮寺）として、能信上人が真福寺を創建した。だから真福寺は「北野山」という。別当寺あるいは神宮寺とは、神社を管理するために置かれた寺のことで、神仏習合の時代にはごく普通の形態。

尾張国中島郡長岡庄大須は、現在の岐阜県羽島市桑原町大須である。なぜ尾張国中島郡が岐阜県なのか。天正14年（1586）木曾川の大洪水で尾張と美濃の境を流れていた木曾川が流路を大きく変え、中島郡、葉栗郡の真ん中を流れるようになった。これにより両郡の北半分は木曾川の右岸になった。天正17年豊臣秀吉の命により、新しい木曾川を尾張と美濃の境とした。このため中島郡と葉栗郡は2国にまたがる郡となった。この時、美濃側の葉栗郡は羽栗郡と名称変更した。こうして、真福寺は美濃国に属することになった。

大須はもと大洲とも書いたようで川の「洲」「中洲」から来ているに違いない。木曾三川が入り乱れて流れていたころ、あちこちに「洲」ができて不思議はない。この大須から南西数キロの揖斐川沿いに高須がある。高須藩は尾張藩の支藩で、幕末に高須四兄弟で有名になった。さらにいえば清須も「清洲」とも書いたわけで同じ由来と考えてよい。

真福寺は、南北朝時代には壮大な伽藍を誇り、多数の僧坊が、広大な敷地の中に配されていた。そのうちの宝生坊が、応安4年（1371）に宝生院として独立した寺院となる。

宝生院の文庫（真福寺文庫）は、能信などが集めた神書、仏書、史籍など数千部を蔵し、後に『古事記』など国宝4点、『将門記』など重要文化財37点が指定されている。この文庫は根来寺、醍醐寺とともに日本三大経蔵の一つ、仁和寺、根来寺とともに本朝三文庫の一つに数えられている。

しかし、宝生院は、うち続く戦乱と水害にいくたびも見舞われ衰微した。なかでも慶長10年（1605）の洪水によって、本尊と文庫は避難したものの、堂宇ことごとく流失した。さらに、慶長14年に完成した木曾川御囲堤によって尾張側は守られるようになったが、美濃側の危険性は増した。

慶長15年からすすめられた清須越が一段落した慶長17年、徳川家康は成瀬正成を供に真福寺を視察した。真福寺文庫を見た家康は、その所蔵文書の量と質に驚いた。文書蒐集家としても一流の家康は、この貴重な文化財の消滅を恐れた。

「正成、これをどう思う？」

「この場所では何度も洪水に見舞われるのは必定かと」

「文庫を名古屋へ移転できないか」

「南寺町に土地の余裕がありますから、移転先は大丈夫ですが、寺の方がなんと申しますか」

「そこはそちの腕の見せ所だな」

成瀬正成は真福寺住職の堯遍を説得、村人もしぶしぶながら従い、名古屋移転を受け入れさせた。

観音が名古屋へ移転する時、本尊を舟に乗せて出発すると逆風が吹いて押し戻されてしまう。何度やってもそうなる。観音様に聞いて見ると「名古屋へ行くのはいやだ」とおっしゃる。「どうしたらよろしいでしょうか」とおうかがいをたてると「行き先の地名を大須と改めるよう」と言われ、「わかりました」と申し上げると、ようやく舟がすすみ始めたという。別れがたい村人たちの気持ちがうかがえる。南寺町の町名が正式に大須となったのは、昭和44年だから、実に350年ほど観音様をお待たせしたことになる。

大須の村人は、昔をしのいで大須の地に寺を建立した。本家の真福寺である。本尊となっている銅製聖観音立像は、真福寺が名古屋に移転する際、地元信者の懇請により残されたものという。この観音は出世観音と呼ばれ、村人の思いが込められている。



羽島市にある大須観音

2 南寺町の大須観音

名古屋に移転した真福寺は南寺町の清寿院の西側に5,755坪の敷地を与えられた。寛永12年(1635)に観音堂を建立、徐々に伽藍の整備を進めた。また、この地域の真言宗の中核寺院と位置づけられ、甚目寺、笠覆寺はじめ尾張、美濃の多くの寺院を末寺とした。

できたばかりの南寺町は、森の中に点々と寺社



元文3年名古屋図に見る大須かいわい

がある状態で、寂しいところだった。しかし、南寺町の中央を南北に貫く道路が美濃路（本町通）であり、この道路沿いに門前町が形成された。門前町から西へ真福寺の仁王門通に向かう道が門前通で、縁日には屋台店が並んだ。

南寺町の南側は千本松原といったが、寛文4年（1664）に開発されて町家となった。ここは古道具、古武具類を扱うことが許された。町はずれでもあり、最初、誰もあまり住みたがらなかったらしく、2代藩主光友が「橋町」と名づけ、移住を奨励したという。こうして南寺町の南側に町家ができたため、門前町の人の行き来が多くなり、南寺町の発展につながったらしい。

橋町の東側は、当初、橋町裏町あるいは裏橋町と称したが、後に東橋町となった。ここでは町内救済ならびに繁栄のために春秋に芝居を興行することが許された。この芝居興行が、次第にその北側にある南寺町の境内で許可されるようになり、西本願寺掛所、七ツ寺、真福寺、清寿院、若宮八幡などで芝居、見世物などが開催された。こうして南寺町は城下町の盛り場となっていった。

大須観音の正式名称は真福寺だということは前述した。それでは、真福寺がいつ頃から大須観音と呼ばれるようになったのか。

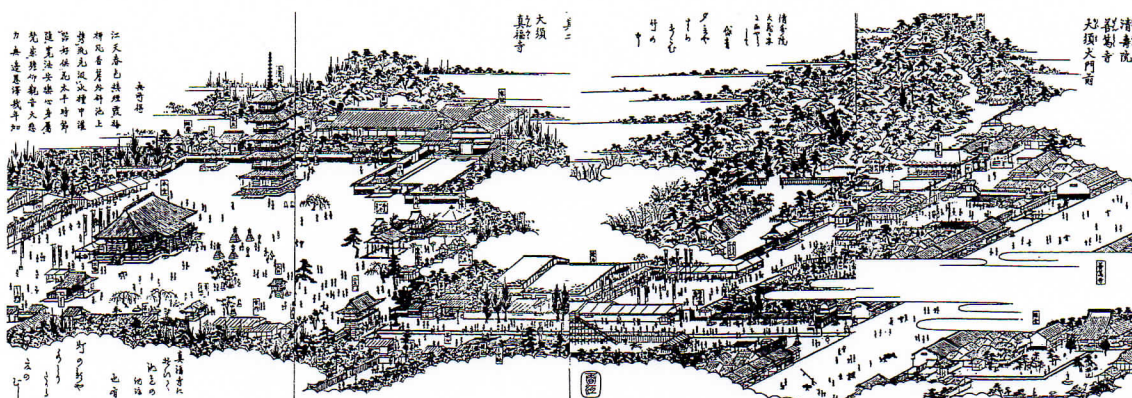
『鸚鵡籠中記』を書いた朝日文左衛門（延宝2年（1674）～享保3年（1718））は芝居好きの記録魔。彼はあちこちの寺社の境内で開催される見世物や芝居をこっそりと見に行き（武士は芝居見物は禁止されていた）、それを日記に記録している。

それを克明に調べていくと、元禄14年（1701）7月までは「真福寺」だったが、元禄14年8月になると「大須」と書いている。以後は全部「大須」である。

その後に登場する芝居好きの記録魔たち、高力猿猴庵、小寺玉晃、小田切春江らはすべて「大須」あるいは「大須観音」としている。

古地図の表記を調べてみると、万治年間名古屋図（1660～70年ごろ）は「観音」とのみ書かれているが、尾府名古屋図（1710～16）には「大須観音堂北野山真福寺」、その20年ほど後の元文3年名古屋図では「大須観音」とある。

これらから推察すると、1700年頃、元禄年間に「大須観音」という呼び方が定着していたと考えられる。



大須観音と清寿院（『尾張名所図絵』より）

3 宗春の登場と失脚

江戸時代の中期に、大須観音を中心とした地域が、一瞬、空前の繁華街となった時期があった。

享保15年（1730）、徳川宗春が第7代尾張藩主に就任した。翌年国入りした宗春は、簡略化していた東照宮の祭礼を以前の状態に戻すよう指示。これまで禁止していた武士に芝居見物を許可した。さらに遊郭、芝居興行も許可した。

享保17年（1732）、西小路、富士見原、葛町の3箇所には遊郭が開業した。これを三郭という。南寺町の周辺の荒野に忽然と現れたのである。遊郭は、このほかにも水主町、天王崎門前、幅下新道など次々と開業した。

尾張藩では、江戸期を通じて城下町に遊郭を禁じていた。したがってこの時期だけが例外となった。

この芸能、祭礼、遊郭の奨励策の結果、名古屋城下では商業が活発化、三都に次ぐ大都市になった。本町通を軸として描かれた享元絵巻（享保、元文期の名古屋を描いた絵巻、名古屋城所蔵）は、当時の空前の繁華を描いたものとして貴重な資料である。

一方で、風俗の悪化、藩の財政破綻を来し、早くも享保21年（1736）には三郭の廃止を指示。芝居小屋も旧来からある所を残し、新規に営業を始めた小屋を廃止させる。空前の繁栄といわれた名古屋の栄華はわずか4年で終わった。

元文2年（1737）になると、4月に藩の諸役人へ綱紀肅正の指示。5月には町人に4千両の上納金を課す。12月には村方へ1万両の賦課を課す。翌年になると村方百姓へ1万5千両、名古屋町中、熱田、岐阜へ合計3万5千両の上納金を要求するという過酷な政治を展開する。

宗春の開放政策をころよく思っていなかった幕府は、元文4年4月、宗春に蟄居謹慎を命じ、享楽の夢は終わった。

西小路、富士見原、葛町の三郭は取り壊し、もとの空き地に戻され、京都、大坂、伊勢から招き寄せた遊女、茶屋女は追い返された。

宗春の政策はこの後深刻な影響を残した。宗春登場前の享保13年（1728）に1万3372両、2万7818石の財政黒字だったのが、宗春失脚直前の元文3年（1738）には7万4607両、3万6489石の累積赤字を抱えていた。宗春の後を継いだ宗勝の儉約政策でその後一時的に黒字になるが、結局明治維新まで、黒字になることはなかった。

こうした影響を受け、南寺町の芝居小屋も一時は火の消えた状態になったが、次第に宗春以前の状態に回復し、文化文政期（1804～1830）以降にはかつてない賑わいを見せた。この時代、全国的な見世物ブームとなり、大須観音門前、清寿院境内、七ツ寺境内などで大規模な見世物興行が行われた。

文政7年（1824）頃には五重塔が完成した。この五重塔は明治25年の大火で焼失した。

尾張名所図会に描かれた清寿院と真福寺を見ると、境内に芝居小屋が描かれ、大勢の人々が行き交っていることがわかる。清寿院の北側にちょっとした山が見える。大須一帯は平だと思っている現代の人々からは信じがたい光景だが、これは大須古墳群の一部である。清寿院は明治5年、廃仏毀釈のあおりを受けて廃寺となり、この古墳部分と浅間神社を含む地域は、地元の請願を受けて明治10年、愛知県下初の公園、名越公園が開設された。面

積2,473坪だったので、かなりの規模の公園だった。

ただし、公園内に浅間神社、樹林地、庭園、飲食店、写真館、遊技場などを含んでいた。名越公園は、鶴舞公園の開設とともに廃止されたが、一部（古墳部分）が名古屋市へ移管され、大正3年、那古野山公園が開設され、現在に至っている。

大須には、このほかに日の出神社古墳、大須二子山古墳などがあるが、日の出神社古墳の上には日の出神社が鎮座している（大須観音の北方、若宮大通沿い）。大須二子山古墳は西本願寺掛所の境内にあったが、戦後大須球場の建設の際、破壊された。

4 遊郭が大須の賑わいをつくった

安政5年（1858）、観音近くの宿屋の主人が女郎屋をはじめた。4軒の旅館が最初といわれ、北野天満宮の辺りだったので、「北野新地」といわれた。

明治6年、県令によって正式に中区日出町に区画を定め遊郭が認められた。40軒余の業者が、北野神社の西から観音墓地北の日出町一帯にかけて、女郎屋の店を構えた。

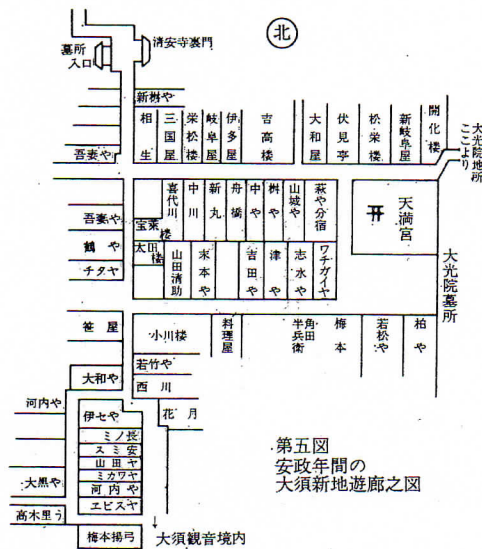
しかし明治9年、観音本堂裏（西）に遊郭設置の免許があり、翌10年新しく「旭郭」が開業。このため北野新地は自然消滅した。この新しい遊郭は、北野新地が日出町にあったので、それにちなんで「旭郭」と命名された。

旭郭は道路のセンターに桜の木を植えた花園町をメインに、若松町、常盤町、城代町、富岡町、吾妻町、音羽町など縦横に妓楼の町が出現した。貸席茶屋105軒、芸妓113名という規模で、5層や3階の建物が目立った。明治全盛期には173軒1,618名を数えている。

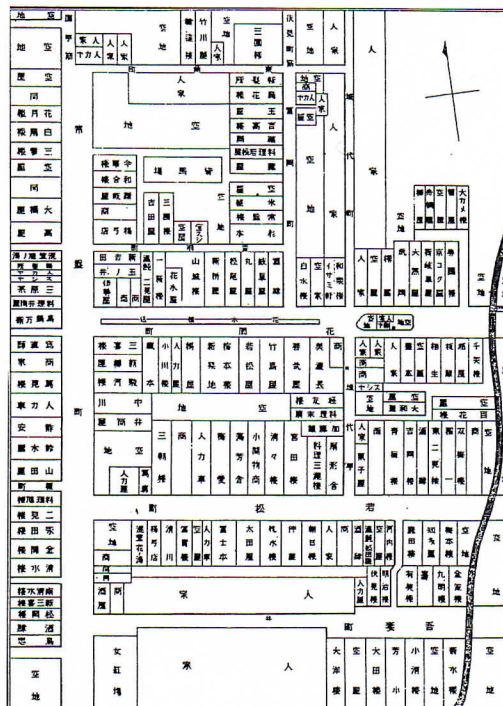
遊郭へ出かける人は「ちょっと大須へ行ってくる」と大須観音参詣を口実にした。この頃から「大須」が大須観音のみではなく「大須界限」を指すようになったと思われる。

旭郭により大須界限は空前の活況を呈することになった。一方で、門前町（本町通）の西側に集中していた賑わいが、東側の総見寺、萬松寺方面へも拡大していった。

明治4年、総見寺で博覧会が開催された。明治7年にも東本願寺別院で名古屋博覧会開催され、分会場が西本願寺掛所に設置された。



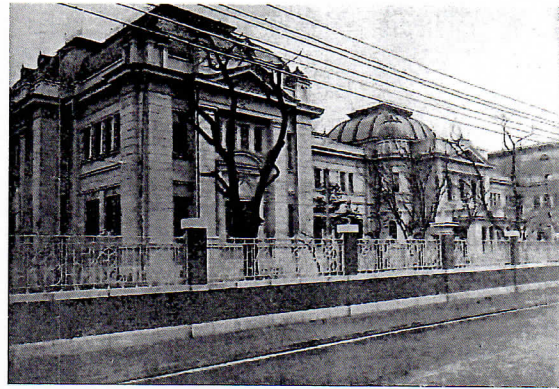
北野新地(『大須大福帳』より)



旭郭

この流れの中で博物館設置の機運が醸成され、明治11年、財界の有力者によって名古屋博物館が建設されることになった。門前町総見寺境内3,800余坪に7棟合計354坪の建物が竣工した。開館を記念して愛知県博覧会が開催され、明治天皇が行幸された。

名古屋博物館は館長伊藤次郎左衛門、副館長岡谷惣助、役員はすべて財界の有力者で構成。しかし、財政困難となり、明治16年県へ移管、愛知県博物館となった。



愛知県商品陳列館

明治44年、愛知県博物館は取り壊され、全面新装の愛知県商品陳列館が開館した。フィラデルフィア・コマーシャル・ミュージアムを見習った堂々たる洋風建築物で寺町の中の異国風建築として大須の名物となっていた。大正10年に愛知県商品陳列所と改称された。商品陳列所は昭和4年東新町の陸田ビルへ移転した。その理由は、総見寺の墓地に建てられた部分が沈下し、改修では対応できなかったためらしい。

明治27年、萬松寺の境内に菊人形奥村黄花園が開設され、人気を呼んだ。本町通からは総見寺と善篤寺の間の小路を歩いて黄花園に行けた。この道が後の萬松寺通。また善篤寺の境内に名古屋警察署門前町分署が設置されていたが、これが新しく門前警察署として移転した後に今泉七五郎が財界から寄付金を集めて今泉動物園を開園した。この動物園は長い間大須の名物となって子ども達を楽しませていたが、大正7年に鶴舞公園附属動物園が新設された際、すべての動物を市へ寄付して閉鎖された。

博物館、菊花園、動物園とバラエティに富んだ施設が本町通東側にあったのである。しかし、この地域がブレイクするのは、明治41年に南大津通が開設されてからである。

明治30年ごろ名古屋電気鉄道株式会社は、広小路通の本町から熱田までの電車線敷設にとりかかったが、本町通沿道とくに大須地区が猛反対した。このため愛知県、名古屋市、名古屋電鉄は新しく道路を建設することにした。南大津通である。

南大津通は、明治41年4月に完成、5月には栄町～熱田停車場間の路面電車が開通し、9月には熱田伝馬町まで開業した。大須付近では、「矢場町」「三輪町」「上前津」停留所が設置された。これにより南寺町の中心道路が、本町通から南大津通へと移動していった。

加えて大須地区の南側に新しい道路が建設された。明治43年に鶴舞公園（予定地）で第10回関西府県連合共進会が開催された。このため、アクセス道路が緊急整備され、南大津通の上前津から鶴舞まで8間の道路が建設された。このときに、門前町～上前津間も整備され、明治44年に電車が門前町まで開業、「門前町」停留所が設置された。

つまり、大須では、東側と南側に電車のアクセスがほぼ同時期に整備されたことになる。

この道路はその後18間への拡幅と門前町以西の建設がすすめられ、大正13年には都市計画道路岩井線（大池町～水主町・現大須通）の新設、拡幅が完了した。電車は、大正12年に門前町～水主町が開通し、現在の西大須交差点の位置に「金沢町」の停留所が設置された。

この東西の18間道路は岩井通（現大須通）と呼ばれ、大須観音や旭郭への最寄りアクセス道路となったが、この道路が西本願寺掛所やその東側の多くの寺院を大須から分断する

ことになった。

5 遊郭のまちから映画のまちへ

大正8年、遊郭の中村移転が発令され、大正12年には旭郭の灯は消えてしまった。遊郭跡の常盤町、吾妻町は大きな女郎屋がそのまま残って、あたかも化け物屋敷のようなおもむきを呈していた。

しかし、遊郭と絶縁した郭連芸者置屋がその化け物屋敷に割拠して再建運動の先頭を切り、続いて旅館営業が順次開始され、その間、小売商店が軒を張るという具合で復活してきた。

旭郭が中村へ移転したことによって、遊郭区域だけでなく大須地域全体が火の消えたように寂れた。大須がいかに遊郭に依存していたかがわかる。

大須の商店主達のうち、大須門前町内会は大須大商組合を結成して、町の有力者や若い商店主たちが鳩首協議の末、「変装大須市場」なる企画を考え出した。

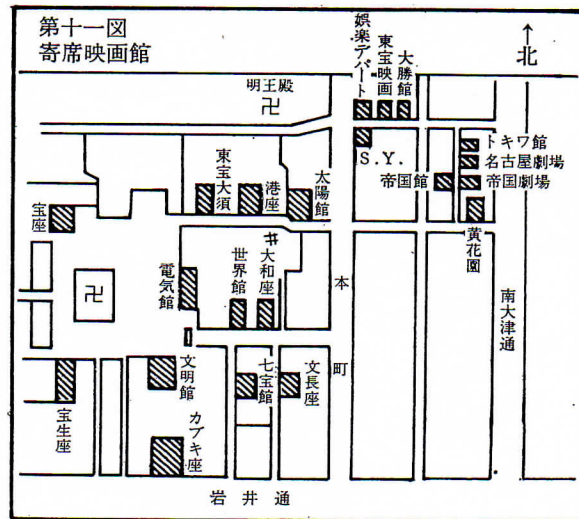
これは「大須市」とも「変装大須市場」とも呼ばれ、大正12年の暮れから、毎月18日の観音の命日を縁日として開く、月例売り出し行事が始められた。この日は下駄屋が端切れを売ろうと、時計屋が用品屋に化けようが、どんな安売りをしようともお構いなしの、特別大売り出しだった。

さらに、大正13年7月には、新愛知新聞社主催のご成婚記念奉仕廉売デーを催したのをはじめ、十姉妹の品評会、キネマ俳優探し、運試し週間、判じ絵、店頭活花会、街頭漫画展覧会などいろいろな趣向を考えて、ほとんど毎月のように打ち出された新企画の行事が予想以上の成功を収め、広小路に客足を奪われがちであった傾向を、一気に挽回するきっかけとなった。

こうして花街をうしなった大須は、むしろ健全な大衆の街としての基盤を定着させ、映画と芝居と寄席を中心として娯楽街の色彩を濃くし、新しい近代的な盛り場として再興していくことになった。なかでも、大須の映画館は、明治41年に名古屋初の映画館として文明館が大須仁王門のすぐ南にオープンしてから、数多くの映画館が開館し、最盛期には20館を超える映画の街になった。

大須観音へのアクセスが南大津通になると、萬松寺や総見寺の境内を抜けて西へ向かう人々の流れに対応する必要が生じた。昭和7年に三輪町線土地区画整理組合、昭和10年に大須土地区画整理組合、昭和13年に大須仁王門通土地区画整理組合が設立され、南寺町内の区画の整理と新しい道路整備を行い、赤門通、萬松寺通、東仁王門通など東西に貫通する道路が整備された。

こうして戦争が激しくなるまでの十数年間、大須は名古屋最大の繁華街となった。



大須の寄席・映画館(昭和13年ごろ)

6 よみがえった大須

昭和20年3月19日の空襲で、大須観音の本堂も燃え尽きた。境内には家を失った人々が押し寄せ、葦簀張りの小屋が所狭しと建てられた。周囲は、食べ物を求める人々で喧噪をきわめた。そうした中で、人々はたくましく立ち上がった。昭和24年には仮本堂と仁王門が落成した。一方で、同時期に開始された戦災復興土地区画整理事業が、大須地区の物理的条件を大きく変えた。

その前に戦争末期に行われた疎開空地が大須観音の西側の環境を激変させていた。これは防空・防火の目的で一定区域の建物を撤去して空地化するもので、50m幅で建物を撤去した。戦後これが伏見通となった。これによりかつての旭郭の大部分は伏見通の中に消えた。

若宮八幡の境内は若宮大通の用地となり、若宮八幡は大須地区から切り離された。多くの寺社が100m道路の南北に分かれたのである。大須にあった多くの寺院にはそれぞれ墓地在り附属していたが、これらが掘り起こされ、平和公園へ移転した。邪魔な墓地がなくなって、整然とした道路網が整備された。

当初の計画では、現在の大須二丁目、三丁目の区域を一つの盛り場として、その中は本町通を除いてすべての道路を遊歩道にする予定だったが、実現しなかった。もしこの案が実現していたら、大須は時代を先取りした世界に誇る繁華街となっていたに違いない。

昭和45年には念願の本堂が再建された。これまでの本堂は東向きだったが、新しい本堂は南向きに建てられた。このため、仁王門の位置と向きも変わった。

その一方で、若宮大通による分断、地下鉄建設に伴う地下街、路面電車の廃止などにより市民の大須への足が遠のいていった。テレビの普及による映画館の衰退も大須の賑わいに打撃をあたえた。

昭和52年、日本映画館の跡地に電腦ショップ「ラジオセンターアメ横ビル」が完成。同年、地下鉄鶴舞線の開業により大須観音駅ができた。こうした変化により電気パーツを求める若い人がどんどん訪れるようになった。

古くから店を営む商店も、呉服店や既製服が中心だったが、後継者がいないなどの理由から店舗をテナントに貸すようになり、若い世代をターゲットにしたカジュアルな店やメイド喫茶、フィギュアの店などが増えていった。

昭和50年、名城大学の池田助教授や学生の呼びかけで、「アクション大須」というプロジェクトが立ち上がり、各所でお化け屋敷や路上ミュージック、寸劇や寄席など、学園祭のようなイベントが開催された。

これが「大須大道町人祭」へ受け継がれ、昭和53年に第1回が開催され、毎年30万人を動員する大イベントとなった。このほか、春祭り、夏祭り、世界コスプレサミットなどさまざまなイベントが開催されている。

円頓寺、大曾根などかつて大須と並ぶ繁華街だった商店街がシャッター街となりつつある今日、大須は1,300店で空き店舗のない商店街を誇っている。